

三十七回蒼天句会 今月の一旬

令和七年十一月十三日 兼題..時雨、又は自由

浅草にしぐれ煮を買ふ冬隣

公子

片時雨昭和レトロな喫茶店

婦紗子

ゆれるトロツコ窓越しの時雨虹

賢一

しぐるるや峠の茶屋の昼灯り

繁一

草の実や人より速き犬の老い

孝志

集落の運動会や豊の秋

洋一

色も香も吸いこまれゆく夕時雨

信江

しぐるるや梵鐘響く鹿の町

静江

二番子まで連れて長旅秋燕

鎮夫

七里ヶ浜江の島の先雪の富士

隆彦

時雨るるや言はずに帰る恨み言

重子

読み返す句集にひかり十三夜

朱美

諏訪の湖蕭条として夕時雨

紹子

句に溶けて整ふ思ひ冬初め

晴代

秋晴れやきらら川波海向きて

久恵